

女性保護司の保護観察体験記

家族支援から学んだこと

窃盗・大麻取締法違反で施設に収容され、その後保護観察になった20代のAさん。

保護観察所で薬物に焦点をあてた指導があるとの事。Aさんが受刑中、生活環境調整からの担当で、母親との面識がありましたので、より生活を充実していく点を中心に面接を実施することを心掛けました。

面接は約束を守り、自らの力で就職先を決め、ひとり生活がスタートしました。

母親に持病があるので、父親の協力を願い説得をしたのですが、生活環境調整中は一度も接することが出来ませんでした。父親は本人を何かにつけて疑い、兄弟姉妹と比べるなどプレッシャーをかけるので、母親が大変苦勞していました。そこで、保護観察官に助言をいただき、自助グループがあることを伝えました。

親の迷いが薄らぎ、話の聴き役に回り、信じて見守る姿勢が大切であると思うようになったと両親共に話された時は安堵しました。

担当して3か月が過ぎた頃、良い関係の女性と交際が始まり転居届を提出し、仕事も彼女との関係も良好で家庭を持つことになりました。

生活は安定し、薬物再乱用防止プログラムをすべて出席して薬物の使用欲求も落ち着き、両親揃っての面接で、「息子夫婦の手助けを出来るのは自分達しかいない」と心強い言葉を聞くことが出来ました。

非行の背景にはいろいろな要因があると思いますが、Aさんの更生は家族支援があればこそのことだと思いました。

年が明けての面接日には、本人、奥さん、そして子供を連れての訪問となりました。

対象者と接する際、無理せず、ゆっくりと社会適応出来るよう、聴く耳を持ち、本人から自分の思いをはきださせる環境を作ることの大切さを知りました。

改めて、家族支援の心強さを知らされたと同様に、家族関係を改善するむずかしさも経験した事例でした。